

子どもたちがのびのびと遊び  
育っていくことのできるまちづくりにむけて



平成 21 年度市民提案型協働モデル事業  
「協働による冒険遊び場づくりモデル事業」報告書

さいたま市

さいたま冒険遊び場・たねの会

# はじめに

この報告書は「平成 21 年度市民提案型協働モデル事業」において『さいたま希望のまちプラン』『のびのび育つ環境の整備 ～子どもたちが安心して過ごせる場の整備～』を推進する事業として企画提案された「協働による冒険遊び場づくりモデル事業」全体の成果と課題をまとめたものです。

「冒険遊び場」とは、1943 年デンマークにおいて「子どもたちは整備された公園よりも廃材が転がっているような場所のほうがよく遊ぶ」ということからつくられた「廃材遊び場」が起源です。日本では 1979 年にはじめて東京都世田谷区「羽根木プレーパーク」が常設に至り、現在日本で冒険遊び場づくりに取り組む団体は 238、週 5 日以上開催している常設の冒険遊び場は 24 箇所となっています。(2009 年 10 月現在)

私たち「さいたま冒険遊び場・たねの会」は、平成 15 年に羽根木プレーパークに見学に行った二人の主婦からスタートしました。公民館での仲間づくり、キャンプ場での開催ののち、平成 18 年 12 月、さいたま市内ではじめて、さいたま市との共催で「冒険遊び場 2days!in 別所沼公園」を開催しました。

この 2 日間の開催は、『さいたま市緑の基本計画』の「安全で魅力ある都市公園の整備 ～市民のニーズを踏まえた特徴ある公園づくり」の中に、「子どもたちが冒険的な遊びを体験できるプレーパークの整備」とあることから、その試験的な取り組みとして「さいたま市公園みどり課（現都市公園課）」とたねの会との協働で行われたものです。その後平成 19 年 9 月からも、市の試験的な取り組みとして毎月第 4 土曜日に限り継続的に開催してきました。

これによってプレーパークづくりが市民に開かれたものになりましたが、月に 1 回スタッフが開催する遊び場はイベント的なものにとどまっていた。子どもにとって「遊び」は毎日のものであり、日々の成長や生活を支えるものであることから、このような遊び場は、子どもの生活圏内にあり、いつでも遊べること、誰でも遊べることが望まれます。そのためには、常時開園されていること（常設）、1ヶ所だけでなく子どもたちが自分でいけるような範囲にたくさんあること、つくりたいという市民が自分の地域につくっていけることが大切です。

そこでこのモデル事業では、さいたま市において、冒険遊び場をもっとみんなのものにしていくためには何が必要か、どうしたらもっと子ども達の成長を支えられるような遊び場づくりを実現することができるのかという視点で、活動を展開してきました。

この事業が今後冒険遊び場づくりを発展させるきっかけとなり、子どもたちがのびのびと遊び育っていくことのできるまちづくりにつながることを願っています。

平成 22 年 3 月 31 日  
さいたま冒険遊び場・たねの会  
代表 佐藤美和

# も く じ

はじめに	1
1. 事業概要	3
2. 事業報告	
(1) 「別所沼プレーパーク」のモデル的開催	4
(2) 「よちよちパーク」の試験的開催	6
(3) 「プレーリーダー」のいる遊び場づくりの実践	8
(4) 「プレーリーダー養成講座」の開催	10
(5) さいたまの冒険遊び場づくりを考える「ちえぶくろ会議」の開催	12
(6) 「子どもの遊びと遊び場に関するアンケート調査」の実施	19
3. 考察とまとめ	
(1) 冒険遊び場の可能性	25
(2) 冒険遊び場づくりをすすめるにあたって	32
(3) 今後に向けて	35

## おわりに

## 資料

- 作成チラシ、リーフレット
- 「別所沼プレーパーク」報告書（第1～11回）
- 「よちよちパーク」報告書（第1～16回）
- 参加者の声
- 現場報告（プレーリーダー：石塚祐太、講師：嶋村仁志）
- 「プレーリーダー養成講座」の記録と講師より
- さいたまの冒険遊び場づくりを考える「ちえぶくろ会議」会議録
- アンケート回答
- 来場者数調査
- 委託団体の紹介

# 1. 事業概要

本事業では、子どもがのびのびと遊び育っていくことのできる街づくりの1つの方法として、市民・行政の「協働による冒険遊び場づくり」を考え、実践を通してその意義や課題を検証し、今後さいたま市で冒険遊び場づくりを展開していく際の基本となる方向性や、その方法、しくみづくりについて検討することを目的に、以下の事業を行った。

まず、冒険遊び場のモデル的開催として、第4土曜日(10～16時)に「別所沼プレーパーク」を開催し、市民の方に冒険遊び場を広く体験してもらおうとともにその運営の課題を探った。第1・第3木曜日(10～13時)には乳幼児の親子にとっての冒険遊び場の可能性を探るため「よちよちパーク」を試験的に開催した。土曜日には冒険遊び場には欠かせないとされる「プレーリーダー」の経験者を招き、プレーリーダーのいる遊び場づくりを通してその必要性を探るとともに、今後活躍できるプレーリーダーを育成していく試みとして「プレーリーダー養成講座」を行った。

また、冒険遊び場の必要性を検証するため、子どもの遊びに関する生活実態や別所沼プレーパークに対する意見をアンケート調査するとともに、冒険遊び場を知ってもらうための広報ツールを作成した。

さらに、行政と市民との協働で運営している冒険遊び場の例に学びながら、冒険遊び場づくりの様々な意義を共有し、常設や広がりを目指すにはどのような運営・協力体制が必要かを行政と市民とが垣根をこえて知恵をだしあい検討していく「ちえぶくろ会議」を開催した。

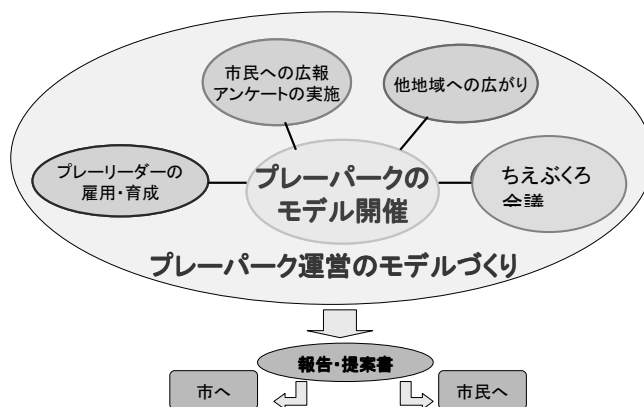
そして、本事業全体を振り返り、今後冒険遊び場づくりを協働で進めるにあたっての望ましいあり方や課題を提案できるものを「報告書」としてまとめた。

## <事業項目>

- ①「別所沼プレーパーク」のモデル的開催
- ②「よちよちパーク」の試験的開催
- ③プレーリーダーのいる遊び場づくりの実践
- ④「プレーリーダー養成講座」の開催
- ⑤さいたまの冒険遊び場づくりを考える「ちえぶくろ会議」の開催
- ⑥「子どもの遊びと遊び場に関するアンケート調査」の実施
- ⑦報告書の作成

次ページより、各項目ごとに事業内容の詳細と事業による成果、課題を報告する。

## 本事業の概要



\*「プレーリーダー養成講座」は「さいたま市社会福祉協議会」との共催で行った。

## 2. 事業報告

### (1) 「別所沼プレーパーク」のモデル的開催

○市民・子どもたちに冒険遊び場を知ってもらい実際に体験できる場、他地域への広がりをはかるモデル的な場として、「別所沼プレーパーク」を開催した。

○11月は3日連続開催し、継続して開けること(常設)のよさや課題を検証する機会とした。

●場所：別所沼公園ドーム前広場

●日時：毎月第4土曜日 10～16時 計11回 \*11月は前後金曜日曜も含む3日連続

(7/25・8/22・9/26・10/24・11/27・11/28・11/29・12/26・1/23・2/27・3/27)

●対象：主に幼児～小学生とその親

●内容：子どもの冒険心にこたえられるよう工夫をこらした冒険遊び場の開催。

遊びの道具や素材、手づくりの遊具を準備し、遊びやすいように配置する。

●基本姿勢：プログラムや禁止事項をなるべくつくり、子ども自身の気持ちや判断でやりたいことができるよう、大人が見守りサポートをする。管理責任の追及が子どもから遊びを奪うことのないよう「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーとし、理解や協力をあおぎながら運営にあたる。

### 【成果】冒険遊び場ってどんな場所？を実際に行い、体験していただくことができた

- ① 子どもたちが自由につくったりこわしたりできる素材や、使える道具があると、子ども達自身が遊びを生み出し発展させていくことができる。素材として準備したものは、ダンボール、端材、絵の具などで、基地づくりや木工遊び、お絵かきなど、普段できないような遊びに発展していた。また、何よりも自然にある、土や葉っぱ、棒、石、などが子どもたちにとって格好の遊びの素材となっていた。
- ② 水を自由に使うことができると遊びがとても広がった。土に水を運んできてのどろ遊び、ダム作り、夏は水のかけあいやプールづくりなど。(1日ずつの遊び場ではできなかったが、常設の遊び場では巨大なウォータースライダーをつかって遊んだりしている)
- ③ 枝のある木にロープをかけて遊具をつくることができた(ハンモック、モンキーブリッジ、ブランコ、ターザンロープなど)。これらの遊びはスリルが楽しい小学校高学年の子に人気があった。
- ④ 通常公園では禁止されている火も、プレーパークでは使わせていただいた。子ども達は身近に火に触れることが少ないので、火自体にとっても興味を持っていた。その火でべっこうあめをつくったり、家から焼きたいものをもってきてあぶって食べる子も多かった。火をかこんでいろいろな人が自然と話しをできたり、寒い季節は暖をとることもできるので、火はあるととてもよい。
- ⑤ 起伏や植え込みなどがあり、子どもたちはそれを利用して遊んでいた。小さな流れがあったので、そこで蛙やアメンボをみつけたり、虫や鳩など、生き物と触れ合えるのも外ならではある。
- ⑥ モノで遊ぶこともだが、人と遊ぶ楽しさが何よりのようであった。ふざけあったり一緒に何かに挑戦してみたり教えたり教えてもらったり。おしゃべりだけでも楽しめる雰囲気があった。
- ⑦ 何もしなくたっていい、がスタンスだが、はじめてで入りづらそうな子どもや親には声をかけて安心してもらえるよう心がけた  
→遊びの様子は 頁「別所沼プレーパーク報告」参照

## 【役割】

- 世話人＝運営スタッフ＝たねの会メンバー（乳幼児から小学校高学年までの子どもをもつ親が中心）

たねの会より毎回5人が黄色いバンダナ(Tシャツ)を身につけ場の運営にあたった。月に1回のミーティングで遊び場づくりの方針や運営方法などについて話し合い、当日朝の打合せでその日の注意点や連絡事項などを、プレーリーダー、行政職員、ボランティアなどと確認し、現場の運営にあたった。打ち合せ後、道具の運び出しを行い、やってくる子どもや大人に声をかけながら、場をつくっていった。場や素材があっても自由な雰囲気や安心感がないと、子どもたちは本当にありのままに遊ぶことはできない。訪れた大人とコミュニケーションをはかったり、この場の趣旨を理解してもらったりすることで、大人も楽しみながら子どもを見守りあえるような雰囲気をつくるのが、世話人の大きな役割の1つである。「地域の遊び場」であるためにも、現場がない日でも、広報活動をしたり、講座を企画したり、行政の方と打合せをするなどして、理解・協力を求める活動を行った。
- プレーリーダー＝「ユウタ」

プレーリーダーの働きについて、詳しくは 頁「プレーリーダーのいる遊び場づくり」参照
- さいたま市都市公園課・・・場所の提供、「さいたま市公園緑地協会」との連絡調整
- さいたま市公園緑地協会・・・公園利用の相談と後始末のチェック
- さいたま市市民活動支援室・・・広報

## 【課題】

- 別所沼プレーパークをモデル的に開催したことで多くの方に実際に体験してもらうことはできたが（1日平均約100名）、月に1回の開催だとまだまだイベント的な姿しかみてもらうことはできず、また3日連続開催したが、常設の遊び場のように掘った穴をそのままにしたりロープをかけたままにしておくことはできず「今日の続きが明日もできる」常設のよさをそのまま試行できたわけではなかった。
- 冒険遊び場では訪れた人が「お客さん」ではなく、主体的に関わってもらい、みんなで遊び場をつくっていく、子どもの育ちを支えていくという意識を育てることが大切である。この開催中、ボランティア7名の受け入れを行ったほか、地域の方や訪れた親御さんも片付けなどを手伝ってくださり、その手ごたえは感じたが、この別所沼プレーパークを常設にしていく場合には、この地域の方にもっと親しまれ、運営にも加わってもらう体制をつくっていく必要がある。
- 他地域への広がりの可能性を探るために、チラシに「自分の地域でもやってみたい」という人を対象に見学受け入れの案内をのせ、希望があれば他地域での開催支援も行うことを予定していたが、実際にこの期間内にそのような動きはみられなかった。しかし、訪れた方で運営の仕方に興味を示す方も多く、「ちえぶくろ会議」や「プレーリーダー養成講座」参加者から「自分の地域でもやってみたい」ということで相談をもちかけられており、モデルとなる冒険遊び場の実践があることで他地域への広がりも期待できることがわかった。今後は他地域で開催する場合の支援の仕方や場所の利用の許可の問題を検討していく必要がある。
- 開催中、擦り傷、切り傷などのけがが8件あったが、子どもを病院に運ぶほどの大きなけがはなかった。また、公園管理の面で苦情が入ることはなかったが、水道の水を多量に使うことに関しての苦情が心配される場面もあり、その点は今後の課題である。

## (2)「よちよちパーク」の試験的開催

乳幼児の親子にとっての、冒険遊び場の可能性を探るため、平日に「よちよちパーク」を開催した。

●場所：別所沼公園ドーム前広場

●日時：平成21年8月～平成22年3月 毎月第1・3木曜日 10～13時 計16回

●対象：主に乳幼児とその親

●内容：子どもの冒険心にこたえられるよう工夫をこらした冒険遊び場の開催。

遊びの道具や素材、手づくりの遊具を準備し、遊びやすいように配置する。

(遊びの例) 穴掘り・水遊び(プール)・泥んこ・たき火・昔遊び・ダンボールを使った遊び、落ち葉を使った遊びなど

(場づくりの工夫)・ハイハイの乳児とその親も楽しめるよう、柔らかい敷物を敷いた居場所をつくる。オムツ替えや授乳もできるようにする。

- ・壊したり探索したりするのが好きな時期の子どもの要求に応えられるよう、自由にできる素材を準備したり、自然の中で思う存分遊べることの良さを実感してもらう。
- ・その年齢なりの挑戦ができるように見守っていく。
- ・自我の芽生える2～3歳の子ども同士の自然なケンカも成長に欠かせないものとして見守りあえる関係がつけられるようサポートする。
- ・親たちがホッとしておしゃべりできるよう、カフェコーナーを用意する。
- ・子育て情報を交換できる場にもなるよう掲示板を利用してもらう。

●役割：

○世話人＝運営スタッフ＝たねの会メンバー3人(同じ乳幼児をもつ母親が中心)

たねの会より毎回3人が黄色いバンダナを身につけ場の運営にあたった。別所沼プレーパークの世話人と同様、月に一度のミーティングで遊び場づくりの方針を考え、遊び場全体の運営を行った。

特に初めて遊びに来た方へは積極的に声をかけるように気を配り、「どこでどうやってよちよちパークを知ったのか」、「普段はどんなところで遊んでいるのか」といった会話から、お母さん達が何を求めてこの場に来ているのかを推し量ることができる。

世話人は、「積極的に子どもたちと遊ぶ」という姿勢ではなく、子どもたちが自由に遊ぶことができるように、お母さん達が子どもの遊ぶ姿をゆったりとした気分で心から楽しんで見守れるようにサポートすることを大切にしている。何よりも、子どもたちの遊ぶ姿を世話人自身が「うわぁ、楽しそうだね」「面白いことするね」「かわいいね」と楽しんで見守ることが、普段の生活の中で早め早めに規制をかけること(かけさせられること)に慣れてしまっているお母さん達に心の余裕を与え、遊び場全体が自由な雰囲気になっていくことにつながっていく。

板を使ってちょっとした坂をつくる、カーテンを使って隠れ家をつくる、落ち葉を集めておくなど幼児の興味や関心をひき出す仕掛け作りなどもおこなう。プレーリーダーを配置していない分、世話人がプレーリーダー的な役割も担ってきたが、あくまで同じ母親としての立場を大切にしている。

○さいたま市都市公園課…場所の提供、「さいたま市公園緑地協会」との連絡調整

○さいたま市公園緑地協会…公園利用の相談と後始末のチェック

○さいたま市市民活動支援室…広報



## 【成 果】

本事業を通して、乳幼児にとっての冒険遊び場の利用価値、屋外型子育て支援施設としての冒険遊び場の可能性が見えてきた。

### 〈屋外型子育て支援施設としての冒険遊び場の可能性〉

- ・開放的であり、出入りがしやすい。気が向かなくなれば、すぐに移動ができる。(遊具のある場所に遊びに行ったり、散歩に行ったり)また、人と人との『間』がとりやすい。
- ・狭い屋内では、エネルギーを発散しきれない子どももいる。迷惑をかけることを気にする母親にとっては、行きづらい場合もあるが、その点屋外では思いっきり騒ぐことも走り回ることできる。
- ・自然を感じて遊ぶことができる。子どもたちは本来、土や水・生き物などに触れて遊ぶことが大好きであり、多くの親たちも、外で自然に触れて遊ばせたいと願っている。
- ・食事・おやつをとれる。この場で昼食・おやつをとれることは、多くの参加者から喜ばれた。
- ・維持管理費が少なく済む。公園の一部を利用する場合、このための維持費はほとんどかからず、必要なのは多少の消耗品費と人件費のみである。

乳幼児は元々、目の離せない年頃であるが、

- ・自分の子どもは親が責任を持ってみなければならない
  - ・他人に迷惑をかけてはならない
  - ・小さな頃から社会性を身につけるために、「かして」「いれて」等と言わせなければならない
- という社会の風潮の中で、親たちは一歩外に出ると気が抜けない状況である。そんな中、
- ・『自分のこどもは自分でみる』から『みんなの子どもをみんなでみる』へ
  - ・子どもは子ども同士の無言のやりとりや多少のケンカを通して人とのつきあい方を学んでいく
  - ・小さい頃から柔らかな素材・清潔なものだけに囲まれるのではなく、自然の中のザラザラ・チクチク・ドロドロに触れ、あつさ・つめたさを感じながら「ちょうどよい」ということを学んでいく
- といった思いを共有し、大らかな遊び場の雰囲気を作っていくことが大切だ。この16回の実践の中で、たねの会・世話人だけでなく、参加者(特に常連化している人)自身がこういった空気を作り出していたことは素晴らしい成果であり、続けていくことを期待する声も数多くいただいている。(→「参加者の声」 ページ参照)

よちよちパークの広報は、チラシの配布(公民館・市民活動サポートセンター・子育て支援センター)・たねの会HP・別所沼プレーパーク掲示板でおこなったが、「掲示板を見て」「口コミで」知ったという方が圧倒的に多く、近所に住む親子の日常的な遊び場としての利用が多いことがわかった。

## 【課 題】

- ・屋外のため、天候・気候の影響を受けやすい。しかし、暑さ・寒さが厳しい時期は、日よけや雨よけのためにタープやブルーシートを張るなどの工夫、暖をとるためにたき火をするなどの対策も取れる。
- ・ハイハイの赤ちゃん、口にモノを入れたがる年頃の子どもを遊ばせづらい。柔らかい敷物を敷くことなどができるが清潔を保つのは難しく、土や葉っぱを口に入れてしまう子もいて、その点では気が抜けない。しかし、お互いの子どもを見守ることができれば、親が一人で子どもを追いかけずにすみ、それがこの場の良さである。
- ・平日昼間のため、世話人の確保が難しい状況がある。今後、負担が分担化されるよう、世話人になれる仲間をよちよちパーク参加者の中からも募っていきたい。



### (3) プレーリーダーのいる遊び場づくりの実践

別所沼プレーパーク開催時に、常設のプレーパークで「プレーリーダー」をつとめたことのある人材を採用し遊び場づくりをするとともに、プレーリーダーの必要性を共有できる機会とした。

- 期間：平成 21 年 8 月～平成 22 年 3 月（毎月第 4 土曜日・11 月は 3 日連続、延べ 10 回）
- 「プレーリーダー養成講座」講師である嶋村さんの紹介で、「新宿・戸山プレーパーク」でプレーリーダーを 2 年間つとめた経験をもつ「ユウタ（石塚祐太）」に現場に入ってもらった。

#### ●子どもたちの変化●

プレーリーダーは子どもの遊びを先導することはないが、入ったその日から子どもたちが自然とプレーリーダーと遊びたがる姿がみられた。プレーリーダー自らが遊んだり作業をしたりする姿や声自体が子どもをひきつける。「おもしろそうなことやってる！」「この人なら遊びをうけとめてくれる！」ということ子どもたちは瞬時にかぎわけ、水をわざとかけてみたり、やっていることを一緒にやりたがったり、自分の遊びにつきあってもらおうとしたり、ひっぱりだこであった。そして、はじめて会った子ども同士でもプレーリーダーがいることで自然につながって一緒に遊ぶ様子も多くなり、全体的に子どもの勢いがあふれた遊び場の雰囲気が変わっていった。

また、遊びを通して信頼を感じるようになると、子どもたちはプレーリーダーに日頃心に抱えていることをつぶやいたり、飾らない気持ちをぶつけたりするようになる。そのような気持ちを受け止めて、時には思ったことはきっぱりと子ども達に話していくプレーリーダー。

「子どもの居場所になる」ためにはこのようなプレーリーダーがいつもそこにいるという安心感があってこそである。

#### ●場づくりの変化●

ハンモックやブランコなどの遊具は、これまでは大人が最初からセッティングしていたが、プレーリーダーは子どもと一緒に遊び場をつくっていくということを大切にしており、子どもたちが「やりたい」と言う前から一緒につくっていく、ということをしていた。そのことは、子どもが主体の遊び場をつくっていくことであり、子どもたちに「ここは自分たちの遊び場」という思いをもってもらうことにつながっていった。大人がつくる場合でも同じように一緒にやる、ということ大切にしていた。また、手づくり遊具をつくる際には、安全なロープの巻き方や設置する場所、子どもたちに適切な道具やその扱い方などに精通しているため、安全を確保しながら子どもたちのやりたいことができる、という状況をつくりだすことができていた。

#### ●安全管理とケガへの対応●

子どもにとって、限界への挑戦が遊びであることもある。そのため、すべての危険をとりのぞくことは子どもからその楽しさを奪ってしまうことにもなるため、プレーリーダーはリスク(=目にみえている、自ら挑戦する危険)は残しつつ、ハザード(目に見えない、隠れた危険)をとりのぞくよう、場に注意を払っていた。例えば、木工遊びでのこぎりを使ってみたい子どもには気を配りつつ見守るが、くぎが飛び出たまま放置されているようなものは取り除いたり注意をしたりする。火をつけてみたい

という子にはまかせて見守るが、風が強くなって引火する可能性が強い時は制止する、というように。自ら動き回って遊びながら点検をしていく、ということを行っていた。

また、けがの際には子どもの気持ちに留意しながら応急手当を行う、ということをしていた。常設のプレーパークでは、けがの際プレーリーダー 2 人が対応するようなマニュアルがつけられている。これまでも世話人がこの役割を果たしていたが、あらゆるけがを想定して、どんなものを準備しておく、どのように手当てをし、フォローしていくのが適切か、ということに精通していた。

思い切り遊べる場をつくっていくため、場への信頼をつくっていくためには、このようなプレーリーダーの働きは大変重要である。

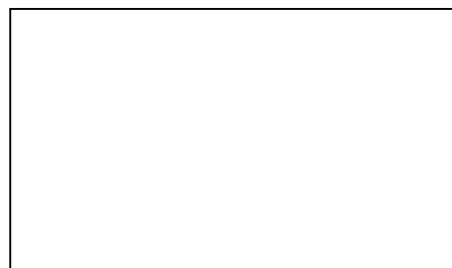
## ●大人とのかかわり●

冒険遊び場は地域の大人の理解があって支えられ、様々な関わりが場を豊かにしていく。地域には様々な背景や思いをもった住民がいる。その様々な大人と語れる言葉を持ち、信頼を得ながら冒険遊び場の趣旨を理解してもらえよう、時には言葉で時には態度で語っていく。

また、大人の力や興味を遊び場に生かしてもらえよう、声かけをしたりまきこんだりしていくコーディネート役も果たしていた。これまでは世話人(=たねの会メンバー)がこの働きもできるような努力してきたが、やはりプレーリーダーはいろいろな大人に対応できる力や伝える力もあり、大人も楽しみながら遊び場にかかわれるように配慮しているようであった。

\* プレーリーダーからみた別所沼プレーパークの変化について  
(→ 頁参照)

常設の遊び場に常駐するプレーリーダーの働きについて  
(→「ちえぶくろ会議 2 回目」参照)



## 【課題】

○常設のプレーパークでは必ず 2 人以上のプレーリーダーが常駐しており、バランスをとって動いているという。プレーリーダー養成講座の時には講師としてもう一人プレーリーダーが現場に入ったため 2 人体制のような場が実践できたが、やはりプレーリーダー自身も動きやすいと言っており、遊び場全体も活気のあるものとなった。そのような体制をつくっていくことが今後の課題である。

○プレーリーダーと世話人は、車の両輪のようにともに冒険遊び場づくりをしていくことが大切である。プレーリーダーは足場を絶対的に子どもにおき、世話人は地域に根ざす市民として軸足をおき、どのような遊び場をつくっていったらよいかを両者がすり合わせていくことで、子どもから・地域から信頼される遊び場をつくっていくことができる。しかし、遊び場開催時間内では、それぞれに訪れた子どもや大人への対応に精一杯で、ゆっくりと振り返りをしたり、その思いを交換したり共有する時間がとれなかった。今後は開催時間以外にプレーリーダーと世話人とが話し合う場をつくっていき、遊び場づくりに生かしていくことが課題である。

## (4)「プレーリーダー養成講座」の開催

さいたま市で今後継続的にプレーリーダーとして活動できる人材を地域の中で独自に発掘・養成していくための取り組みとして、「プレーリーダー養成講座」を実施した。

### 【初級編】

①ワークショップ 子どもが「遊ぶ」って（参加者3名）

平成21年11月21日 13:30～16:30 市民活動サポートセンター

②、③現場実習 遊んでみよう！作ってみよう！（参加者4名）

平成21年11月28、29日 9:30～16:30 別所沼プレーパーク

### 【中級編】

①ワークショップ 子どもの遊びにかかわる大人の役割（参加者5名）

平成21年12月12日 13:30～16:30 浦和ふれあい館

②、③現場実習 子どもの冒険と安全／遊びの環境づくり（参加者4名）

平成21年12月26、平成22年1月23日 9:30～16:30 別所沼プレーパーク

④ふりかえりとまとめ 私のワクワクはどこにあった？（参加者3名）

平成22年2月13日 13:30～16:30 浦和ふれあい館

●対象：さいたま市の冒険遊び場づくりに関わってみたい人（18～30歳）

●定員：各回10名

●参加費：無料

●講師：嶋村仁志さん（通称：めだか）

イギリスの大学でプレイワークについて学ぶ。羽根木プレーパーク（世田谷区）、川崎市子ども夢パーク、どんぐり山プレーパーク（練馬区）でプレーリーダーを務める。

「子どもの遊びと大人の役割研究会」代表。日本冒険遊び場づくり協会理事。

訳書に『プレイワーク～子どもの遊びにかかわる大人の自己評価』（学文社）。

共著に『もっと自由な遊び場を』（大月書店）。

子どもが遊ぶことの大切さが社会で広く認知されるための土台作りを研究している。

●共催：さいたま市社会福祉協議会

(→ 頁 チラシ参照)



## 【成果と課題】

他市の事例を見ても、独自にプレーリーダーの養成を行っているプレーパークは実は少ない。全国冒険遊び場づくり協会による「遊育プログラム」などの取り組みもあるが、定期的・継続的なものではなく、プレーリーダーは常に不足している状態である。

同時に、プレーリーダーが職業として社会に認知されておらず、給与・待遇の面でも不十分・不安定であるため、若者が職業として選ぶのに難しい状況である。

プレーリーダーは、多様な背景を持った、不特定多数の子どもたちと関わる職業であり、高度な技術を要求されるプロフェッショナルであることが、社会で認識され安心して働ける環境を用意しない限り、人材の確保は難しい。

今回の講座では、修了後継続的にプレーリーダー（または候補生）としてさいたま市のプレーパークに関わり続けられる人を求めていたため、「30才くらいまでの若者」を対象として想定していたが、結果的に集まってきたのは子育て中の母親がほとんどであった。

広報として、

- ・さいたま市社会福祉協議会の広報誌「ぼけっと」への掲載
- ・図書館・市民活動サポートセンター・さいたま市社会福祉協議会での募集チラシの配置
- ・近隣を中心とした8大学へのチラシ送付

をおこなったが、ターゲットとしていた若者、学生の目に触れることが少なかったようだ。よりターゲットに適した広報媒体を研究する必要がある。また、他市（福岡市）の成功している事例を見ると、このような活動に理解のある大学（教授）との連携が見られる。私たちも今後は大学や専門学校の指導者となつながりを持ち、連携をはかることで学生や若者ともつながっていけるように努めていきたい。

今回講座を実施してみて、プレーリーダーの養成は短期間でできるものでは無いことを改めて確認した。子ども観・遊び観などを考えるワークショップと現場での実習（経験のあるプレーリーダーと一緒に）、ふりかえりを繰り返し行うことが重要で、その点では今回の講座の構成は間違っていなかったと思う。しかし、最終回に受講者から指摘があった通り、職業としてのプレーリーダーの現状について明確に説明できていなかった点は、反省すべき点である。

現状、プレーリーダーの役割、他の職業（保育士、児童厚生員など）とのちがいがプレーパーク業界全体において明文化されていないため、非常に分かりづらいものになっている。今後、誰にでもわかりやすく、シンプルに説明できるよう整理していく必要がある。

「プレーパーク」「プレーリーダー」という名称さえ社会に定着していない現状で、広く一般に対して「プレーリーダー養成講座」への参加を漠然と呼びかけるのは難しいかもしれない。今後は、ボランティア活動などを通してプレーパークに関わってくれる若者に対し、研修の場を用意するという形での養成も有効であるかもしれない。

※講師からの考察は                      ページ、日本のプレーリーダーの現状は                      ページ参照

## (5) さいたまの冒険遊び場づくりを考える「ちえぶくろ会議」の開催

行政と市民との協働で運営している冒険遊び場の例に学びながら、冒険遊び場づくりの様々な社会的意義を共有し、常設や広がりを目指すにはどのような運営・協力体制が必要かを行政と市民とが垣根をこえて知恵をだしあい検討していく場として、この会議を開催した。

- 日時： 第1回 平成21年10月30日（金）10～12時  
第2回 平成21年11月9日（月）10～12時  
第3回 平成22年1月18日（月）10～12時
- 場所： 市民活動サポートセンター（南ラウンジ・北ラウンジ）
- 参加者の募集方法： 公募（さいたま市市民活動支援室のHPにて呼びかけ、チラシの配布）  
担当課から関係各署へ出席依頼
- 内容： 第1回 冒険遊び場をご存知ですか？（参加者16名）  
第2回 協働による遊び場づくりがはじまっています（参加者16名）  
第3回 さいたままでできることを考えてみませんか？（参加者12名）

\*内容の詳細→「ちえぶくろ会議会議録」参照

### 第1回 冒険遊び場をご存知ですか？

- 出席者 ・市職員：保健福祉局保健部 1名  
保健福祉局子ども未来部  
子育て支援課 2名  
市民活動支援室 2名  
都市公園課 2名  
南部都市公園管理事務所管理課 1名
- ・公募：5名（それぞれの方の所属・専門分野：保育園園長・選択理論心理士・  
地域子育て支援者・不登校から立ち上がる会代表・まちづくり）
- ・たねの会：3名

#### ○会議資料および配布資料

- ①「ちえぶくろ会議」チラシ
- ②子どもの遊びと遊び場に関するアンケート
- ③ちえぶくろ会議 事前アンケート
- ④冒険遊び場づくり基礎知識
- ⑤公募参加者持参資料（3枚）
- ⑥プレーリーダー養成講座2009チラシ
- ⑦ たねの会プレーパーク開催チラシ

#### 1. はじめに

市民活動支援室から（市民提案型協働モデル事業について）

都市公園課から（「別所沼プレーパーク」について）

たねの会から（この会議の位置づけと趣旨について）

#### 2. 参加者自己紹介

初対面の参加者同士が打ち解けられるよう、また子どもの頃を振り返ることで「子どもの遊びとはどんなものだったか」「今の環境はそれと比べてどうか」ということを考える土台になるよう、「子どもの頃の遊びの武勇伝！」を紙に書いて、出身地が北の人から順に発表しながら自己紹介をしてもらった

### 3. 子どもをとりまく環境の今日的課題の共有

「遊びと遊び場に関するアンケート」「参加者の事前アンケート結果」から、子どもをとりまく環境の今日的課題として考えられることをあげて紹介し（→⑥「アンケート調査」参照）、その後、参加者で意見交換を行った。

### 4. 冒険遊び場づくりの紹介

- ・全国の冒険遊び場づくり
- ・冒険遊び場(プレーパーク)とは
- ・別所沼プレーパークの様子（遊び場で大切にしていること）
- ・冒険遊び場づくりの基本的な姿勢
- ・冒険遊び場の社会的意義
- ・冒険遊び場で重視したいこと
- ・冒険遊び場の運営に必要なこと

### 5. 次回の内容の確認と「振り返りシート」の記入

<振り返りシートより抜粋>→ 頁 参照

- 子ども同士で遊ぶことには、かつて親は登場しなかったと思います。むしろ大人から隠れて遊んでいました。子どもの遊び場を大人が用意して運営しなければいけない時代なのかと感じました。
- おひとりおひとりの遊び、お話し、とてもおもしろかった。だれにでも遊びゴコロはあってひょっこり顔をだすものだろうなあ。でも組織やなんやと大人のいろいろな都合を優先して生きてて、結局は子どもの都合はあとまわしになるんだよなあ。どうしたらできるか、という話し合いにしていきたいし、いけるような気がしました。
- 子ども達（いろんな問題もひっくるめて）を受け入れ、子ども達が「今が楽しい！」「自分は自分のままでいいんだ」と思える居場所を作りたいですね。まさに「冒険遊び場」は、願ったり叶ったりの場所ですね。
- 社会の変化の中で十数年前と比べても、子ども達の置かれている環境が激変してきているという認識、またそれが子ども達に良くない影響を及ぼしているという認識は参加者の中で一致していた様に思えます。今後の会議では、それぞれの立場で「私達には何が出来るのか。」真剣に考え、現状をどうして行こうかという部分、皆さんと一緒に知恵を絞っていけたらと思います。
- まず、行政の方、子どもに関わる仕事をしている方、市民団体などが一つのテーブルについて話し合えた意義はとても大きいと思いました。

## 【成果と課題】

行政の方といろいろな立場の市民の方とが集まって、1回目ではどんな会議になるだろうかとドキドキしたが、みなさんざっくばらんに語っていただくことができ、とても楽しい場にもなった。かつて自分が子どもだった頃の遊びや遊びの環境と今とが大きく違ってきていることや、このことへの危機感について話され、また、子どもの遊びを阻む大きな原因として、大人の子どもの理解のなさや、大人同士のコミュニケーションの不足、責任問題から遊びを「規制」してしまうことなどが実例とともに指摘された。大人同士が警戒しあっていることで子どもの遊びへの許容度が低くなるという話題にもふれられ、あらためて今回のちえぶくろ会議は、行政と市民とが同じ席で「子どものため」を考え話し合えたことだけでもとても大きな意味があったと思う。いろいろな立場はあっても、まずはお互いを理解するために本音で話し合えることがとても大切であることが実感できた場であったと思う。

## 第2回 協働による冒険遊び場づくりがはじまっています

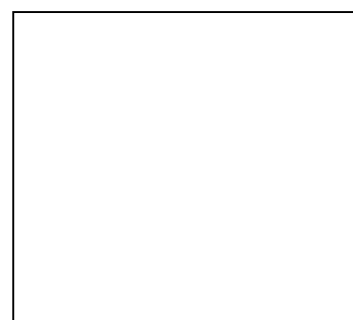
- 出席者：・市職員：保健福祉局保健部 1名  
保健福祉局子ども未来部  
子育て支援課 1名  
市民活動支援室 1名  
都市公園課 2名  
南部都市公園管理事務所管理課 1名
- ・公募：6名（それぞれの方の所属・専門分野：  
選択理論心理士・地域子育て支援者・不登校から立ち上がる会代表・  
まちづくり・埼玉冒険遊び場づくり連絡会代表・子ども環境アドバイザー）
- ・たねの会：4名

### ○会議資料および配布資料

- ①第1回振り返りシートまとめ                      ②冒険遊び場づくり実践のポイント  
③冒険遊び場づくり自治体事業事例紹介          ④振り返りシート

1. 自己紹介（1回目出席していない方）
2. 前回の振り返り
3. 他市の事例紹介

講師：嶋村仁志さん（通称「めだか」）  
（日本冒険遊び場づくり協会理事・「川崎市子ども夢パーク」  
「プレーパークむさしの」プレーリーダー・訳書に『プレイ  
ワーク～子どもの遊びにかかわる大人の自己評価』  
パワーポイントを使いながらお話いただいた



川崎市子ども夢パーク

4. 質問・意見交換
5. 次回の説明と振り返りシート記入

<振り返りシートより抜粋> → 「ちえぶくろ会議会議録」 頁参照

- プレーパークの全体像やプレーリーダーのかかわり方が聞けて大変よかったですと思います。総合マネジメント的な役割が重要だと改めて考えさせられました。
- 嶋村さんの学ばれた playwork 学科のような学びは日本ではできないのかな。  
「子どもに必要なこと」の共通認識が行政側にも今現在オトナであり市民生活を送っている人たち全てにも必要なのかなと。
- プレーリーダーってすごいと感じました。虐待を受けている子どもと相対して児童相談所と連携することがあるとは……。児童福祉司や心理士的な役割をこなす重さを感じます。単なる学生ボランティアや市民ボランティアを超えた重要性を感じました。
- 市民団体さんが行政とやりとりを密にとっていたりと、どちらかという行政を引っ張っているような印象を受けた。
- 市民が運営に参加する意味、まちづくりとしての意味がよくわかった。
- プレーパークが子ども（様々な背景を持っている）の大切な居場所になっていて、プレーリーダーが子どものかかえている問題ごと共有していく、責任のある立場である存在だということがわかりました。

## 【成果と課題】

講師の嶋村さんは、イギリスの大学で「プレイワーク」を学び、日本ではじめて常設に至った羽根木プレーパークでプレーリーダーをつとめた経験もあり、現在は「川崎市子ども夢パーク」「プレーパークむさしの」でプレーリーダーをつとめるかたわら、「プレイワーク」という考え方を日本に紹介し、冒険遊び場だけでなく子どもの遊びにかかわる大人すべてが共通して持っていたいことを整理し広めようとしている方である。IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）の東アジア副代表もつとめ、諸外国や他市の事例にも精通していることから、今回は冒険遊び場の意味するところ、社会に定着させていく方法などを詳しくお聞きすることができ、また、ご自身のプレーリーダーとしての経験をうかがうことで、冒険遊び場の存在意義について深く考えることができた。

「なぜ冒険遊び場づくりなのか」という点については、「子どもの遊びを振り返ることは子どもが育つまちを考えること」「遊ぶ」という体験が、子どもの育ちに提供してきたものを見直すこと」であるという話があった。イギリスでは、「質の高い遊び環境の整備は、国家の課題」として、国が多額な予算のもと、調査や環境整備に乗り出していることが紹介され、子どもの健康的な成長と安全を両立させるために「危険を管理する」という考えが整理されていることも紹介いただいた。また、冒険遊び場自体は、単なるひとつの施設でしかないが、子どもが外で遊ぶことの大切さを発信するための「地域の拠点」という機能を持つことになる、という点も話された。

また、公園に「〇〇してはいけません」という看板が増えているが、それは行政が悪いのではなく、行政に入る電話のほとんどが苦情になってしまっていることが影響しており、冒険遊び場は、トラブルも住民同士で解決できるようなしくみづくりをしていくことであり、「住民によって運営することが大事」という話もあった。また、うまくいっている冒険遊び場は市民と行政の協働がうまくできていることが事例とともに紹介された。

### ○複数の担当課で取り組む事例

#### <世田谷区>1979年開園

- ・公園法の運営上、公園課単独の事業は難しい。福祉部児童課(当時)が「児童健全育成推進事業」に位置づけることで、行政としての事業化が可能となった。
- ・日々の場の運営は市民の運営母体が、公園管理事務所とともにすすめ、事業自体の管理は福祉部とやりとりする。
- ・世田谷区は、事業を「世田谷ボランティア協会」に委託。

#### <武蔵野市>2008年開園

- ・「特色ある公園づくり」の一環として、緑化環境課が公園として場を整備。事業の主体は児童青少年課。
- ・運営母体となる市民は公募で集められた。2009年にNPO法人となった。
- ・市民団体は、世田谷と同様に、雇用 / 予算 / 折衝 / 経理事務 / 広報 / 研修近隣住民への対応などを行政と連携しながら自立的に行う。

#### <国分寺市 / 横浜市 / 町田市>

- ・市民が運営できるように条例を整備している

また、質問・意見交換では、主に常設の冒険遊び場でプレーリーダーをしていることから見えてきている子どもの様子や、プレーリーダーの働きについて、詳しくお聞きすることができた。



その中で、プレーパークで出会った、虐待を受けている子、「僕大人になれないかも」とつぶやいた不登校の子、リストカットをさりげなくみせてくる子のことなどに触れられ、「遊び場では生活で抱えていることがでてくる。それもふくめて支えていけるようになりたい」との話があり、プレーリーダーは様々な背景をもつ子どもにむきあう重い仕事であることが感じられた。

「プレーリーダーとして、出勤してから退勤するまでどんなことを考えてどんなことをしているのか」という質問に対して、時間を追って1日の仕事を話していただいた。

- ・ 8時45分 出勤し、日誌を読み返しながらから1時間くらいミーティングをする。  
(役所との連絡事項、苦情、広報の準備についてなど)
- ・ 10時 場をあけて、物を出す。  
遊び場の外に掃除にでたりすると近所の人と会話ができたりするので外にでることを大事している。  
そのうち乳幼児の親子連れがやってくる。話しかけてもらえるような話しやすい雰囲気・安心感をつくれるように心がけている。親が連れてこない乳幼児はここに来ることができないから。もぞもぞしているような子にはちょっかいを出したりできるかぎり子どもとかかわりをもつようにしている。変な話だが「ナンパ力」をもつこと。子どもからお年寄りまでそれぞれの人に対して語れる会話力をもつこと。1回だめでもあきらめない。「遊ばせてもらってありがとうございました」と言ってもらうのではなく、一緒にやる側に入ってもらえるような当事者意識を持ってもらえるようにすることがその場を育てることにつながる。
- ・ 午後 小学生がぼちぼち来る。遊んでほしいという子もいるし自分たちだけで遊びたいという子もいる。自分たちで遊んでいる子からのリクエストに応え、物を出したりする。  
遊んでほしい子からは子どもたちのエネルギーを引き出せるように。自分たちだけでやれるなと思ったら出来る限り早く引く。場の力をつけていけるように。看板をつくるのも子どもたちのいる時間になるべくするようにしている。それも子どもたちの遊びになっていく。
- ・ 5時頃 片付けはじめる。6時閉園。振り返りを行う。これが1番大事。  
気になることはなかったか、救急箱のストックの確認など。見ていると子どもたちのちょっとした変化が見られる。そこでも子どもの様子をその場にいない大人にどうやって伝えていくか。他にも、子どもとのかかわりで、関わりすぎていなかったかなどの反省をする。  
日誌を書く。

以上、第2回目では参加者同士の意見交換はできなかったが、プレーパークの社会的な意義を深く考える回となった。

日本でもイギリスのように国家的なレベルで子どもの遊びの環境を保障することを考えていかなければいけない時にきているのではないかと感じた。

## 第3回 さいたまでできることを考えてみませんか？

○出席者：・市職員：保健福祉局保健部 1名 市民活動支援室 1名  
保健福祉局子ども未来部 都市公園課 1名  
子育て支援課 2名

- ・公募：3名（それぞれの方の所属・専門分野：  
地域子育て支援者・不登校から立ち上がる会代表・子ども環境アドバイザー）
- ・たねの会：4名

○会議資料および配布資料

- ① 第2回振り返りシートまとめ
- ② プレーパークの他都市実施状況
- ③ 振り返りシート

### 1. 前回までの振り返りと今回の進行役の紹介

<進行役：西川正さん>

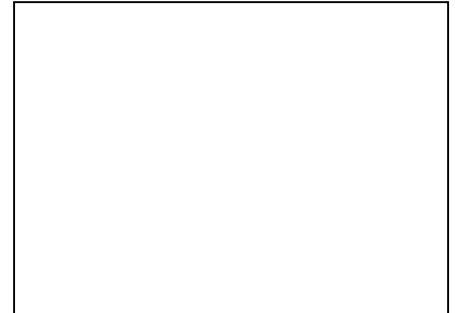
コミュニティとコミュニケーションの創造と変革をテーマとする NPO 法人市民活動情報センター「ハンズオン！埼玉」代表理事。『私の大事な場所～公共施設の市民運営を考える』編者。父親の子育て参加を応援するためのプロジェクト「おとうさんのヤキモタイム」を毎年実施。保育園の保護者会活動にも熱心にとりくむ2児の父。学童保育や障害者自立センター勤務などの経験も持つ。

### 2. ワークショップ

①自己紹介（今日の気分と今日の話し合いに期待すること）

②今日のテーマの確認

「冒険遊び場の常設を可能にしていくにはどんなことが必要か」ということをテーマにポストイットに課題と思われることを1枚に1つ、一人何枚でもよいので書いて出し合い話し合った。



### 3. おわりのあいさつ・振り返りシート記入

<振り返りシート> 「ちえぶくろ会議」全体を通しての感想や、今後へむけた意見

- 目的や目標を明確にして、今後も行政と市民が意見を出し合えるこういう会議が続けられるように望みます。
- 参加してよかったです。「現状の理解」「子どもの今の遊び環境」「なんで冒険遊び場なのか」をもっと広く知らせていきたいと思いました。
- 「継続」には運営者が疲れてしまわないことが大切だと思います。金銭面、人材面 etc・・・誰かに負担が集中しないよう、組織の充実が図れるといいですね。
- 行政は市民が地域を公正によくするための装置にすぎません。その装置を動かすためのスイッチ（目的・効果など）を明確にすることが行政を動かすコツだと思います。

→詳細は 頁「ちえぶくろ会議会議録」参照

## 【成果と課題】

3回目は進行の素晴らしさもあって、今後遊び場づくりを進める上で何が必要になってくるのか、という知恵や貴重なご意見をみなさんからいただくことができた。その点を以下にまとめてみたい。

課題としては、まずもっと市民に向けて、遊びの環境についての課題や「子どもにとっての遊びの大切さ」に関する理解を広めること、冒険遊び場づくりへの理解を広め、必要性をアピールすることがあげられた。その際には、遊び場開催をもっと周知し、親にみてもらうことで必要性に気づいてもらうことが大事なのではないか、たねの会以外にも遊び場づくりをしてみたいという動きがおこってくるとよいのではないかとのお話があった。

また、実際に運営をしていくにあたっての方法や、市民と行政との役割分担について整理し明確化することが必要、ということもあげられた。(苦情が出た時の対応、開催時間以外の管理、開催場所の確保などについても)

そして、まずひとつ常設の遊び場を市内につくり、そこを中核として他地域への広がりをはかるとよいのではという意見もあり、別所沼プレーパークの常設にあたっては、地域の担い手をもっと増やすこと、地域の理解や協力をもっとはかり、しっかりとした運営体制をとれるようにしていくことなどが課題としてあげられた。

プレーリーダーを確保するために、もっとプレーリーダーという存在の理解や必要性を広めていき、プレーリーダーの社会的地位を高め、職業として確立させる(なり手をふやす)ことが必要であり、プレーリーダーを雇用するための予算獲りを行政がしていくこと、そのための根拠をはっきりさせることなどが必要ではないかという話もあった。また、プレーリーダーを養成するための方法として、拠点となる常設のプレーパークが必要ではないか、行政と市民団体が一緒に取り組めないか、などの話もあがった。

さらに、行政の支援も増やせるよう紙でみせられるものをきちんとまとめておき、予算の積算と根拠を明らかにした上で、継続的な経費を確保してもらえるようにすること、行政内部でも関係各課と調整をはかる担当課を決めてその連携をはかれるようにしていくことなどが課題としてあげられた。

また、このような課題を解決して冒険遊び場づくりをすすめていけるよう、今回のちえぶくろ会議のような市民と行政とが一緒に話し合える場を継続していくことが望ましいとの声もあった。

以上、この会議で課題として出されたことはどれも大事なことであると思うのでぜひ今後につなげていけるようにしたい。また、この会議を通してできたつながりを今後も大切にしていければと思う。

## (6)「子どもの遊びと遊び場に関するアンケート調査」の実施

別所沼プレーパークとよちよちパークを訪れた人を対象に、子どもの普段の遊びの実態を聞くとともに、別所沼プレーパークやよちよちパークの感想や意見をうかがい、ニーズを探るためのアンケート調査を実施した。

- 場所：別所沼プレーパーク、よちよちパーク
- 期間：平成 21 年 8 月～平成 22 年 2 月
- 対象：別所沼プレーパーク・よちよちパーク来場者
- 回答数：別所沼プレーパーク 96 よちよちパーク 16
- 設問内容：

- ・ご自身の年齢 \_\_\_\_\_ 歳 / 男・女      ・お子さんの性別 男・女
- ・お子様の年齢 \_\_\_\_\_ 歳（小学\_\_\_\_年・幼稚園・保育園・未就園・中学生以上）
- ・お住まい 市内（南区・浦和区・桜区・緑区・西区・北区・大宮区・見沼区・中央区・岩槻区） 市外

### Q 1. 日頃よくお子さんが（またはお子さんと）遊ぶ場所はどこですか。

自分の家／友人の家／祖父母の家／道路／公園／校庭／子育て支援施設／商業施設／その他  
( \_\_\_\_\_ )

そこではどんなことをして遊ぶのが多いですか。

( \_\_\_\_\_ )

### Q 2. 今の子どもの遊びの環境や子育ての環境について、なにか気になることや要望などありましたらお書きください。

---

### Q 3. 別所沼プレーパークは何でお知りになりましたか？

チラシ（設置場所： \_\_\_\_\_） / たねの会HP / 子育てきっかけ応援ブック / ポスター / 看板 / 知人より / たまたま来てみたら / その他（ \_\_\_\_\_ ）  
別所沼プレーパークを利用するのは今日で何回目ですか？      （ \_\_\_\_\_ 回目）

### Q 4. 今日の遊び場の感想やご意見などありましたらおきかせください。

### Q 5. このような遊び場を毎日開催することについてどう思いますか？

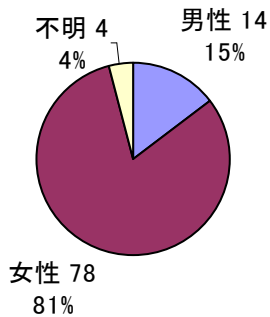
よいと思う / 思わない / どちらともいえない  
《その理由》

### Q 6. ご自分の住んでいる地域に、このような遊び場が必要だと思いませんか？

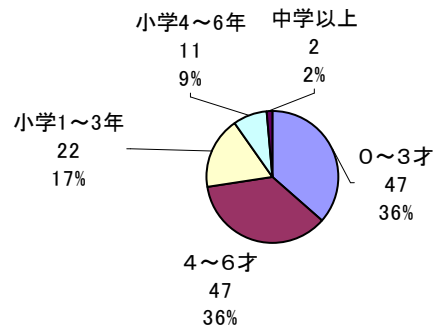
思う / 思わない / どちらともいえない  
《その理由》

# 【結果】 別所沼プレーパーク

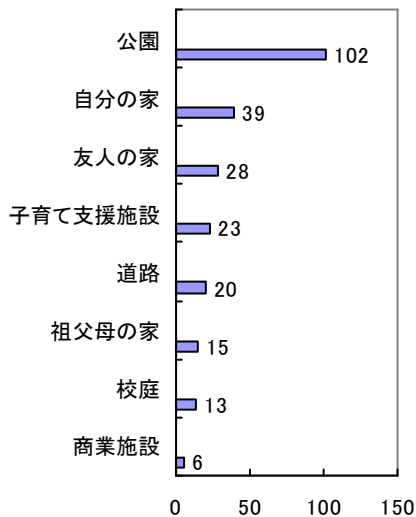
回答した大人の性別(単位:人)



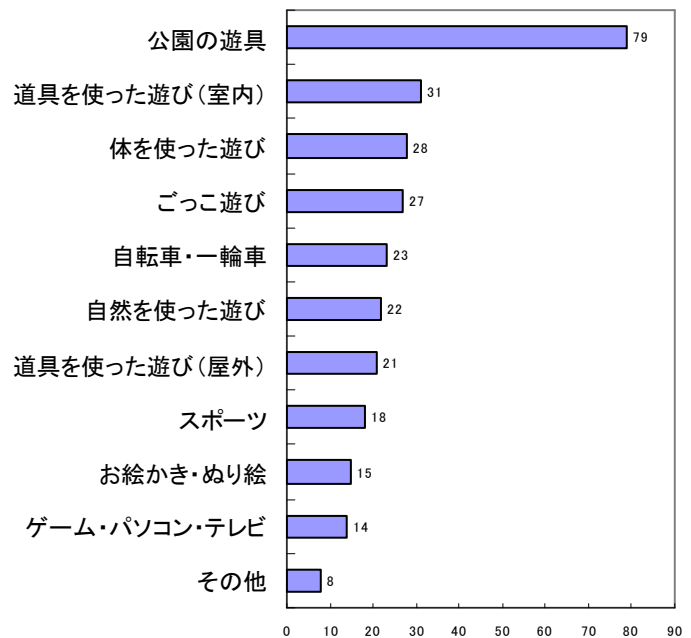
子どもの年齢(単位:人)



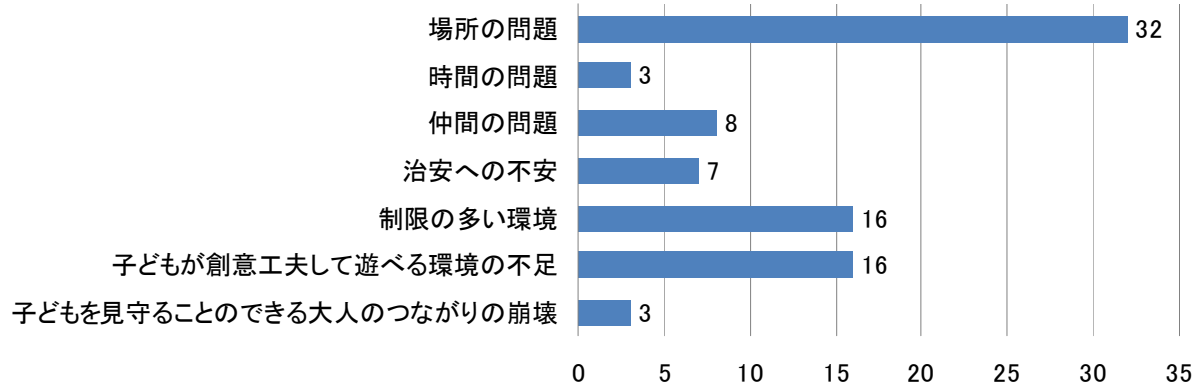
Q.1 日頃よく遊ぶ場所はどこですか？  
(複数回答 単位:人)



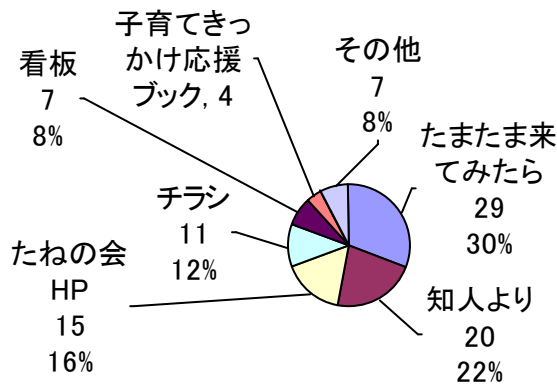
Q1.日頃よくする遊び(複数回答 単位:人)



Q2.子どもの遊びの環境や子育ての環境で気になること(単位:人)



**Q3.別所沼プレーパークを何で知りましたか？(単位:人)**



**Q4. プレーパークへの感想や意見 (自由記述)**

〈代表的な意見〉

- ・子ども親ものびのびできました。
- ・プレーリーダーや大勢で遊ぶことに抵抗のない他の子どもたちがいるので楽しそうにしている良かった。
- ・野生的で土まみれで子どもが生き生きしているように見えます。すごくいいと思います。
- ・知らない子が私の所に来て～してくださいと頼りにしてくれました。うれしいですね。いろんな人と子どもがふれあえる場がよいと思います。自分の子が別の大人からアドバイスを受けている姿を目にしました。有難いです。
- ・たき火や泥遊び等、普段できない遊びができて、親子共々楽しめました
- ・みんなのびのび、いろいろな体験ができて貴重な時間が過ごせました。
- ・子どもが自分で考えて何かをする事が少ないのでとてもありがたいです。みんなが自由に遊んでいるので親の私もいつもはダメがどうしても出てしまいますが、今日はおおらかな気持ちで遊ばせられました。

**Q5. 毎日開催することについてどう思いますか？ (単位:人)**

よいと思う 81 (84%) よいと思わない 4 (4%) どちらともいえない 11 (12%)

〈よいと思う理由〉

- ・毎日遊ぶのが子どもです、是非毎日開催を。
- ・子どもが様々な経験ができる。
- ・学校以外の居場所が必要だと思いますし、子どもを見守る大人がいることで子どもの心の余裕がうまれると思います。
- ・水を使ったりしても怒られない場所は遊ばせたい親にとってもうれしい場所です。
- ・毎日開催してほしいが、スタッフの方々が大変ではないかと心配。

〈よいと思わない理由〉

- ・週1回位でいい、人数が集まらないと大変なのは。
- ・運営するサイドの負担はどうなんでしょうか

**Q6. 自分の住んでいる地域に、このような遊び場が必要だと思いますか？ (単位:人)**

思う 84 (88%) 思わない 4 (4%) どちらともいえない 8 (8%)

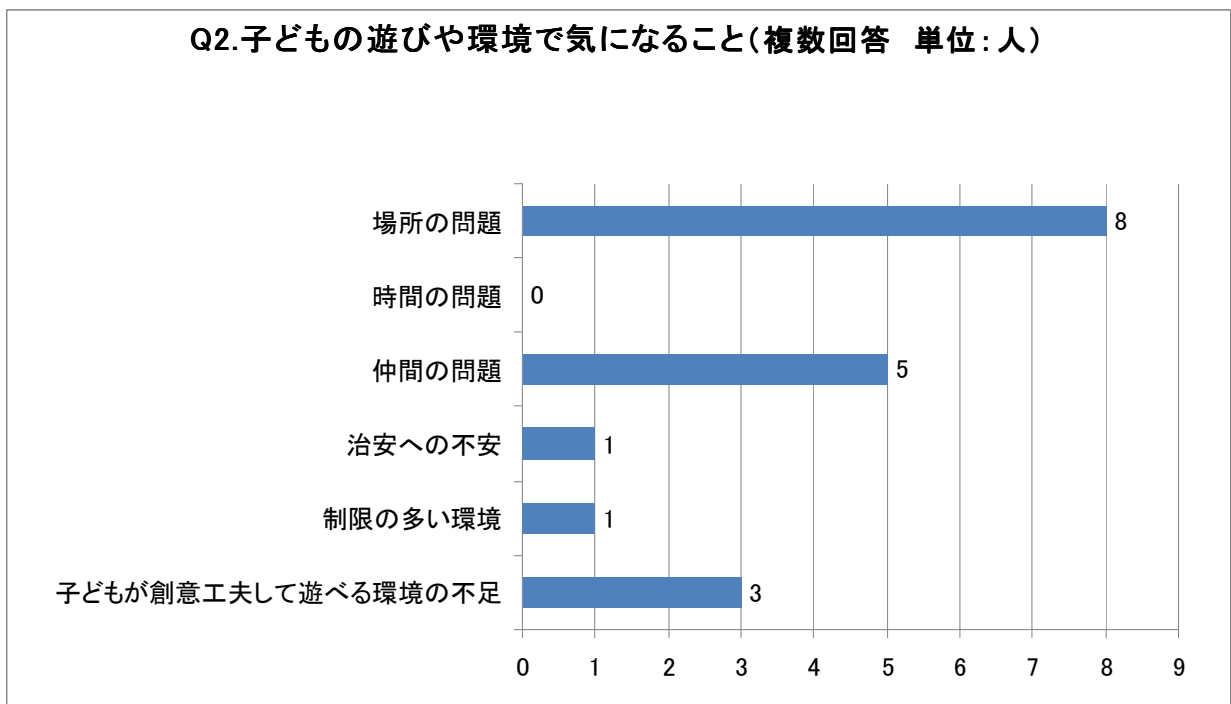
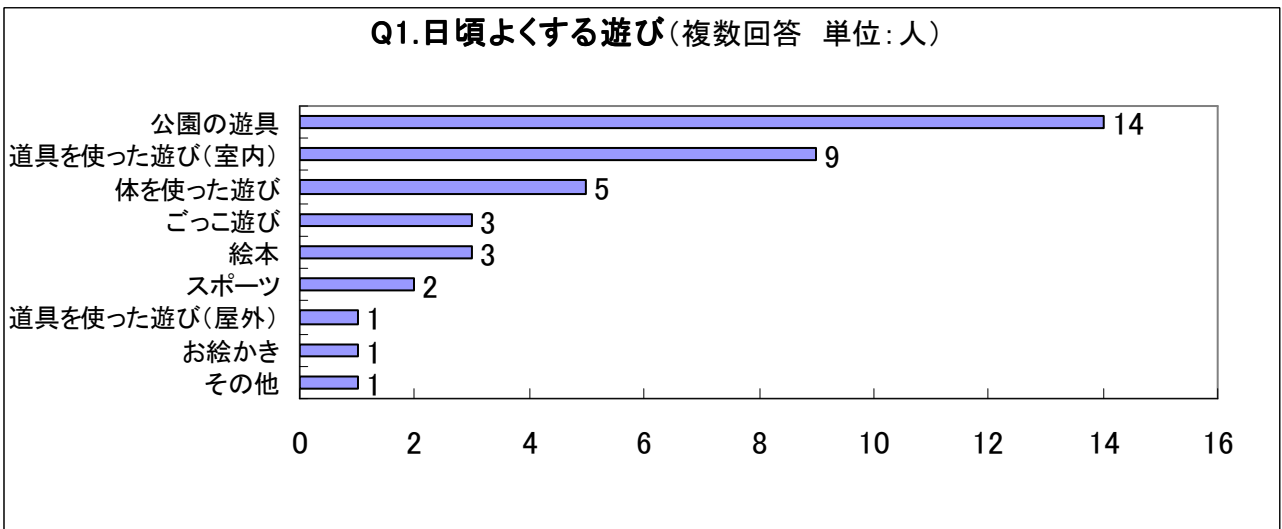
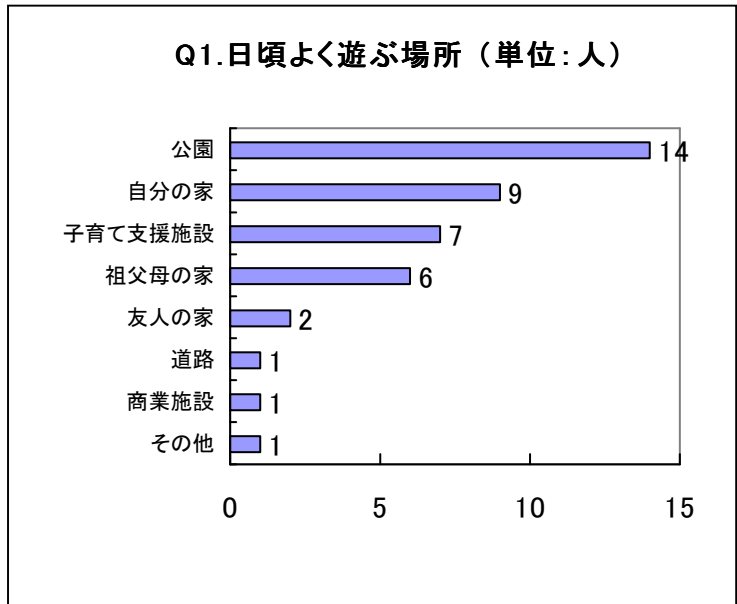
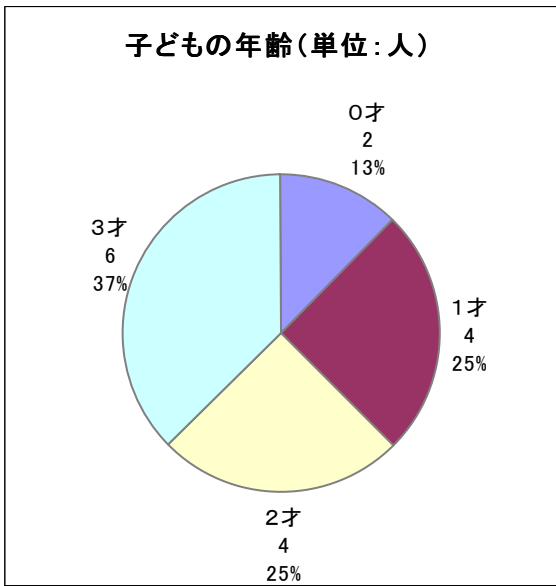
〈思う理由〉

- ・周りに自然の中で遊ぶ環境がないので
- ・子どもが思いっきり遊べる場所が必要だと思うので
- ・いつでも遊べる場所があるのは子供にとって心を開放できる。たくさん必要です。
- ・子どもが学校から帰ったら一人で遊びに行ける場所になると本当にいいです。ぜひいろいろな地域に作ってください。

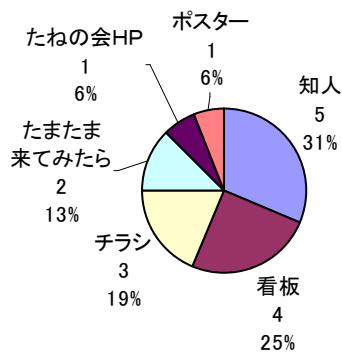
〈思わない理由〉

- ・子どもは自分で遊びを開発するのでたまに来て面白いかもしれない

# よちよちパーク



**Q3.よちよちパークを何で知りましたか？(単位:%)**



**Q4. プレーパークへの感想や意見 (自由記述)**

〈代表的な意見〉

- ・〇〇しなくちゃ！というのがなくてのびのびしている。遊びの誘導が少ないのは意図的なことなのでしょうか？
- ・やりたいことをいろいろやらせてあげられるのでとても楽しそうに遊んでいる。とても良いと思います。
- ・自然と触れ合う良いきっかけだと思います。

**Q5. 毎日開催することについてどう思いますか？ (単位:人)**

よいと思う 14 (88%) よいと思わない 0 どちらともいえない 2 (12%) (単位:人)

〈よいと思う理由〉

- ・おもいっきり遊ばせたいし、他の子と遊ぶ機会があまりないので。
- ・集える場所があるとうれしい。
- ・いろんな友達と出会えて、おもちゃもなくて、でもずっと遊べるって楽しいからですよね？スタッフの方の関わりも自然でいいなと思います。四季を肌で感じるって大切だと思います。

〈どちらともいえない理由〉

- ・開催する人が大変なのでは？でもいつでも行かれるのは良い事なのかな？

**Q6. 自分の住んでいる地域に、このような遊び場が必要だと思いますか？ (単位:人)**

思う 16 (100%) 思わない 0 どちらともいえない 0

〈思う理由〉

- ・泥んこ遊びができる場所が少ない
- ・自然でゆったりした時間、そばで遊ぶ友達があれば他になくても育まれると思う。
- ・近所の人たちとコミュニケーションの機会が増えるので必要だと思います。
- ・近くにあれば毎日でも通いたいです。



## 【考 察】

別所沼プレーパーク・よちよちパーク利用者ともに、普段遊んでいる場所は飛び抜けて「公園」が最も多く、次いで「自分の家」であった。遊びとしては「遊具を使った遊び」（砂場、滑り台など）「屋内での道具を使った遊び」（おもちゃ、絵本など）が多いことがわかった。

子どもたちが屋外での遊びを好むこと、外遊びの場としては圧倒的に、公園が利用されていることが分かる。一方、親の問題意識として「安心してのびのび遊べる場所が少ない」（場所の問題）、「子どもが工夫して遊べる場所がない」「公園に行っても遊具でしか遊べず、自分の思いつきで自由に遊ぶことが物理的にもできず、そうやって遊ぼうとしない子ども達が気になる」（子どもが創意工夫して遊べる環境の不足）と言った意見が、数多くあげられていた。

別所沼プレーパーク世代では、「ダメなことが多くて子どもがやりたいように遊べる場所が少ない」「公園ではボール禁止のところも多く遊びが制限されたりして難しい」（制限の多い環境）と言った声も多かった。

別所沼・よちよちともに多かった（仲間の問題）については、よちよち世代では、「集団生活の経験不足。異年齢のお友達との触れ合い（の不足）」別所沼プレーパーク世代では「習い事をしている子が多く遊ぶ約束ができる友達が少ないため自分の子も習い事に通わせるという悪循環」「子どもが少ないので他の家の子どもと遊ぶ機会、きっかけがなかなか作れず、社会性を育むことが難しい」と言った声があった。

プレーパークへの意見・感想としては「のびのび遊べる」「子どもがやりたいことができる」「普段できない遊びができる」「人とのつながりがある」「自然に触れられる」「子どもにダメと言わずにすんで親ものんびりできる」などの点があげられ、それらはちょうど普段の遊びの中で問題となっている部分と合致している。

毎日開催については別所沼84%、よちよち87%の方がしたほうがよいと答える一方で、「よいと思いますが、管理・運営が大変なのでは？ご協力できればと思いますが」といった、運営の負担を気づかう意見もいくつかあった。今後は、そういった方々に一緒にこの場を支えていってくれるように呼びかけるとともに、私たち運営スタッフが「サービスする側」来場者が「サービスされる側」といった構図ではなく、「みんなで作る場」であることを説明し、みんなが当事者であるという意識を持ってもらうことで、運営の負担を軽くするとともに、来場者の「申し訳ない」という心の負担もなくなっていくよう努めたい。

また、「自分の地域にも必要」という回答が圧倒的（別所沼 88%、よちよち 100%）であった。

以上の結果から、親たちが子どもの遊び環境の現状に、強い不満と不安を抱いていることが読み取れる。このままではまずいという、危機感すら感じ取れる回答も多くあった。

もっとも問題とされていたのは、遊ぶ場所の不足であったが、その場所もただ公園があればいいというわけではなく、「子どもがやりたいことができる場所」、「子どもが工夫して遊べる場所」、「集える場所」といった「質」が期待されていることが分かった。これらの点は、まさに冒険遊び場（プレーパーク）の特長といえる点であり、冒険遊び場に対しての高いニーズがあると認められるだろう。

### 3. 考察とまとめ

#### (1) 冒険遊び場の可能性

ここでは、本事業からみえてきた「冒険遊び場」の可能性について考察してみたい。

##### ① 子どもにとっての遊びを保障する場所として

IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）の『子どもの遊ぶ権利宣言』のなかでは、遊びを次のように説明している。

「遊びは、基本的に必要な栄養・健康・保険及び教育に加えて、すべての子どもの潜在能力を発達させるために不可欠なものである。

遊びは、本能的なものであり、自発的なものであり、かつ自然に起こるものである。それは生まれながらのものであり、探求的なものである。

遊びは、コミュニケーションであり、自己表現であり、思考と行動を結びつけるものである。

遊びは満足及び成就感をもたらすものである。

子どもは生まれた時から、自分の感覚と周りの世界を確かめながら育とうとする力を持っている。寝返りをしてハイハイをして立って歩きだして・・・ということは、周りからの温かい見守りと刺激の中で自分自身で試行錯誤して獲得していくことであり、そうやって子どもは楽しみを感じながら少しずつ世界を広げていく。そしてそのペースや何を好むかは人それぞれに違っている。

子どもにとっての「遊び」というのは、このような世界への挑戦ともいえる生まれ持った生の営みであり、人が生涯にわたって繰り返していく「生きること」そのものである。

子どもの遊びはそのような意味で、世界を知らない存在が限界を確かめるためにいろいろなことに挑戦する、という面をもち、時には大人からみて「危険」と思われることもある。しかし子どもからこの危険を奪ってしまうということは、子どもの挑戦や意欲、成長する機会、しいては生きることそのものを奪ってしまうということにそのままつながっている。

だから、大人はその機会を奪うことなく、子どもの生命を守れるような遊びの環境をつくり守っていく必要がある。

羽根木プレーパークの初代プレーリーダー天野秀昭さんは「子どもは小さな大人ではない。子ども時代を子どもらしく過ごすことが大人になるために必要なことであり、子ども時代は自信を育て周囲への信頼を築く、生きていく上で大事な根っこを生やす時期でもある」と述べている。

これらのことは数に表して検証できることではないが、開催中の子どもたちの様子や変化、大人の方の感想などから、冒険遊び場はこのような、子どもにとって大切な「遊び」を守り、そのことを発信する場としての大きな役割を果たしていける場所であると感じた。

## ②子どもをとりまく環境の課題に取り組むまちづくりの活動として

アンケートやちえぶくろ会議では、現在の子どもの遊びの環境に対する懸念の声が多く聞かれた。かつては道路や空き地、庭や塀などあらゆる場所が子どもにとって思い切り遊べる場所であり、多世代が共に暮らす顔のみえた地域の中で、子ども達は外に飛び出し、大人の見えないところで「悪さ」も「けが」もしながら遊んでいて、そのことが子ども自身を育てることもつながっていた。

しかし、宅地化が進み交通量も増え、危険と思われる場所にはどんどん柵ができ看板が増え、まず遊べる場所が失われていった。核家族が増え子どもが減り、群れて遊ぶことや遊びの伝承が難しくなることと並行するように習い事などをする家庭が増え、子ども同士自由に遊べる時間が減ってきた。

このようないわゆる「三間（場所・時間・仲間）」の不足の問題にプラスして、子どもの遊び場として残されている場所や施設においても、けがに対する責任問題や迷惑をかけてはいけないという風潮から、子どもの思い切った遊びが許されなくなってきた傾向がある。また、プライバシーや防犯が重視される風潮の中、地域の人々の顔がみえなくなり、物騒な事件が子どもを外へ出すことの不安を増長させている面もある。それに代わるようにしてゲームや商業施設などの室内での遊びが増えてきている。

本来子どもは大人の手を借りず勝手に遊ぶものということも言われ、個々にはまだ充分思い切り遊んでいる子どもたちも見受けられるが、このような社会的な環境の変化の中、もはや子どもにとって必要な遊びの環境を、大人が積極的に保障していかなければいけない時代にきてしまっているという認識が、必要になってくる。

講師の嶋村さんも述べていたが、「子どもの遊びを考えること」は「子どもが育つまちを考えること」であり、かつての遊びの体験を振り返ることはただの昔話やノスタルジーではなく、「遊ぶ」という体験が、子どもの育ちに提供してきたものを見直すことである。

冒険遊び場づくりは、単に施設をつくることではなく、大人たちがこのような課題をみつめ、子どもが育つまち、子どもの育ちを考え、できることを実践していく、その過程にも意味がある活動である。

### ③子どもの居場所として

行政の取り組みにおいても、「子どもの居場所づくり」が課題になっていることが多いが、冒険遊び場は遊び場づくりであると同時に、「子どもの居場所づくり」としての意味がとても強い活動である。

子どもにとっての「居場所」とは何かを考えた時、ただ施設があって人がいればよいのではなく、子どもがありのままにいられて、それを受け止めてくれる大人がいることがとても重要である。常設の冒険遊び場ではプレーリーダーの存在がいるからこそ遊びにきているという子どもが多い。遊びを通して信頼を感じるようになると、子どもたちはプレーリーダーに対して何気なく心にひっかかっていることをつぶやいたり、相談を寄せたりする。

学校の中や地域の枠組みの中でも居場所づくりが行われているが、この冒険遊び場のよさは、その外に独立してあることである。もちろん学校や地域と連携はとるが、子どもにとって出会う価値観が学校や家庭や地域の枠組みとは違うところにあることで、たとえその既存の枠組みの中に自分の居場所がみつけれなかったとしても、新たにここで自分を見つけ直したり、関係を作り直したりすることができる。もちろん、それはその子どもの気持ちを支える大人（プレーリーダー）の存在があってこそのことである。

ちえぶくろ会議 2 回目の講師の話の中で、不登校の子どもやリストカットの跡を見せる子ども、虐待をされている子どもの話があった。そして「まだここでそれを表せたり気づける子どもはいいかもしれない。今の子どもは深いところでそのような闇を抱えていることが多く、遊びの世界にはそれが表れていることが多い」との話があった。

冒険遊び場を誰のために何のためにつくるのかと言われたら、まず何よりもこのような子どもの居場所となれるように、という認識が非常に大切ではないかと考える。

#### ④子育て支援の場として

冒険遊び場という小学生の子どもたちの遊び場という印象が強いが、本事業では、特に乳幼児の親子にとっての冒険遊び場の可能性も探るため「よちよちパーク」を開催してきた。その成果については②「よちよちパークの開催」ですでに述べた通りであるが、その中でも以下の参加者にきいた本音が今の子育て環境を象徴しているのではないかと思う。

毎回のようによちよちパークに参加しています。

別所沼公園には、プレーパークの有無に関わらず、ほぼ毎日子どもと遊びに来ています。それはそれで楽しいのですが、面倒なことも。それは色々な意味で子どもを見張っていなくてはならないということ。

もちろん、小さな子どもですから危険なことがないように見張る。遊具があると、かえって危険が多くなります。コンクリートや鉄の柱がそこにあるので、よちよち歩きには危険。常に子どもを押さえつけ、または抱え上げられるよう、そばをついて回り俊敏に動けるようスタンバイ。これだけでも疲れます。

さらに私を疲れさせるのが、おもちゃの取り合いと遊具の順番待ち。まだ自分のものと他人のもの、順番、等という概念のない我が子がよその子のダンプカーを勝手にうばい、人を押しのけて滑り台をのぼり…とその度に「すみません」と頭を下げ、相手の親もわかってるから「いいですよー」とは言ってくれるものの、無言ではイケナイという暗黙のルール。逆に謝られる立場になるのも面倒くさいし、もういっそのこと「公園には私物は持ち込まない！」という規則を作ってほしい、とすら思っていました。他人に迷惑をかけない、という社会性を身につけさせなければならないのは当然なのですが、あまりにも「見張って」いなければならないのは非常に疲れます。—ってというか、他人とぶつかり合って社会性を身につけていくんじゃないの？或る程度は放っておいた方が…と思うようになったのです。

プレーパークの良さは、まず遊具がない。自由に走り回ることができます。危険を避けるのは当然ですが、遊具のある場所よりゆったりできます。

また、何でも見守ってみよう、という雰囲気なので、細かいところまで親が口出しせずに済むのは、私の精神衛生上、とても良いのです。

滑り台が上手に滑れるようになったのも嬉しいけれど、おもちゃでないものでも遊べるのが発見できたのも嬉しいこと。このまま、何もないプレーパークを続けていただきたいです。(1歳男児母)

父親の育児参加が注目されてはきているが、まだまだ乳幼児の日常は母親がつきっきりで見なければいけない状況が多い。密室育児などとも言われているが、外に出たとしてもこのようなプレッシャーが母親にはかかっていることが多い。

子どものそのままを見守る、ということはなかなか浅い関係やひとりではしにくい。ここでは子どもも親も本当に大切なことは何なのかを考え、実践し共有していくことを大切にしている。また、今回は乳幼児の親子だけの場所になっていたが、通常のプレーパークのように小学生からお年寄りまで入り混じって遊べる場であると、小学生が自然と小さい子の面倒をみてくれたり、お年寄りとの触れ合いがあったり、親ひとりが子どもを育てるのではなく、いろいろな人の中で子どもが育っていくという状況ができ、そのことは親にとってもとても助かる場になる。親にとってもいろいろな人と井戸端会議ができる場であり、そのような場が毎日近くにある、ということは日々の生活の心の支えにもなり、ここでできたつながりがまた日常を支える関係へとつながっていくことで、本当の意味で子育てを支えられる環境づくりになっていくのではないだろうか。

## ⑤様々な人が交流できる「ひろば」として

地域にはいろいろな人が暮らしている。しかし生活と仕事の場が別々になり、目的別にしか人が集まることの少ない社会の中で、地域に暮らすいろいろな人たちが気軽に寄り合えるような場所や機会が不足している。子どもにとっては、家庭と学校以外のいろいろな大人の存在に出会うことが難しくなっている。

冒険遊び場はオープンな場所であることから、いろいろな大人がふらっと立ち寄っておしゃべりしたり遊んでいってくれたりする。また、自分の得意なこと、好きなことで遊び場づくりに協力していただくことも多い。お孫さんを連れての方がおはじきを教えてくれたり、釣りをしに来ていた方がベーゴマにはまったり、ロープワークが得意なお父さんがブランコをつくってくれたり、お母さんたちが料理をつくっていたり。そんな中、冒険遊び場では親子じゃないのに一見親子かなと思うペアがいつのまにか誕生していたりする。

大人の姿をみられたり一緒に何かをできるということも冒険遊び場のとてもおもしろい要素であり、大人との触れ合いの中から子どもたちが感じたり学んだりすることもある。いろいろな大人が来られるからこそ心配な部分もあるが、そこはスタッフがフォローをしながら、子どもたちには自分の感覚で人との距離感や身を守ることを覚えてもらえる場になればと願っている。

また、教育の場では年齢ごとに子どもが区切られてしまうことが多いが、ここでは年齢に制限はない。乳幼児から中学生、高校生、大学生まで来てもらっても OK で、異年齢が一緒にいられる遊び場であることもとても貴重な場所である。

羽根木プレーパーク初代プレーリーダーの天野秀昭さんは、子どもの育ちには「斜めの関係」が必要、と述べている。親と子、先生と生徒、という縦の関係でも、学校の友達同士という横の関係でもない、斜めの関係。それがプレーパークでは容易にできる。

また、ひとりひとりがありのままに遊べる場を目指した時、障害を持つとされている方にとっての居場所にもなれたらと願っている。教育の現場では分けられてしまう子ども同士でも共有できるような場づくりを目指したい。

地域に住むいろいろな人たちがまず出会えること。大人たちがいろいろな人たちと同じ場を共有しようとするのが、子どもたちが安心して過ごせる社会につながるのではないかと思う。

## ⑥協働によるまちづくり、自治意識を高める取り組みとして

冒険遊び場の運営は住民が主体となることが根幹である。現在、公園には「ボール遊び禁止」「火気厳禁」「ルールを守って遊びましょう」などの看板が多く見受けられる。先日は子どもの声がうるさいのはそこに噴水をつくった行政の責任だ、という裁判もあったが、これは個々人の不都合が当事者同士で解決されることなく、管理者である行政に届いてしまうことで起こってくる問題の1つであると思われる。

いろいろな人が暮らす街の中で、子どもが自由に遊べる場所をつくるためには、まず「何かあったら行政にお願いする」という姿勢から、自分たちの地域の問題は地域で解決していく、という姿勢で、理解や協力を得ながら遊び場づくりをしていくことが必要である。

また、冒険遊び場づくりは、市民だけでは進められない問題も多く、社会的な課題をはらんでいるため、行政の援助、行政との協働が必要になってくる。公園利用の問題をはじめ、先に述べた「子どもにとっての遊びを保障する場として」「子どもの環境に取り組むまちづくりの活動として」「子どもの居場所づくりとして」「子育て支援の場として」「いろいろな人が交流できるひろばとして」といった様々な側面をもつことから、複数の課にその課題がまたがっている。その関係各署と市民とが協力しながら進めていくことで、安定し充実した運営が可能になっていく。

本事業で行った「ちえぶくろ会議」では、市民も行政もともに学びながら考えることで街が変わっていく可能性を実感した。この事業が協働によるまちづくりを活性化することにつながり、市民の自治意識が高まることで、さいたまの風土が変わっていくのではないかと考える。

## ⑦さいたま市の計画における取り組みとして

平成21年11月、子どもが輝く“絆”で結ばれたまちを目指した『しあわせ倍増プラン』が策定された。このことにもなつてつくられる『さいたま希望のまちプラン』（さいたま市総合振興計画）の新実施計画（素案）の中には、「子育てするならさいたま市」の実現のため、「放課後や週末等に子どもたちが安心して健やかに育まれるための事業の推進」「子育て支援、世代間交流のための施設整備」「一人ひとりの子どもが輝くための総合的な理念・方策を定めた条例の制定」「児童虐待の発生予防、子どもの権利に関する普及活動」「父親の子育て参加の応援」などが計画されている。

また、『(仮称)さいたま子ども・青少年希望プラン』（さいたま市次世代育成支援対策行動計画（後期計画）の素案）には、「大人や社会からの視点だけでなく、子ども・青少年の幸せを第一に考え、子ども・青少年の視点に立った取り組み」「市民・事業者・行政など社会全体が絆で結ばれ、その役割を担いながら相互に連携・協力し、次世代の育成を支援するという視点に立った取り組み」を進める、という視点が打ち出され、「親と子ども・青少年が安心して健やかに暮せるまちづくり」「子ども・青少年の人権が尊重され、のびのびと心豊かに成長できる社会づくり」が基本目標とされ、その中には「子どもたちや青少年が安心して過ごせる居場所づくり」「子ども・青少年の権利を尊重し、地域で見守る体制の整備」が基本施策としてあげられている。

さらに、「次代を担う子ども・青少年の自立を支援する環境づくり」という目標の具体的な取り組みの中に「豊かな遊びの場や自然に恵まれた生活環境を整備することにより、子ども・青少年の自立を支援する環境づくり」があげられている。

本事業で行った「冒険遊び場づくり」の取り組みは、これまで『さいたま市緑の基本計画』の「安全で魅力ある都市公園の整備 ～ 市民のニーズを踏まえた特徴ある公園づくり」「子どもたちが冒険的な遊びを体験できるプレーパークの整備」に基づいて行ってきたが、このような公園整備の面に加えて、上記のような「子ども・青少年」の幸せや成長を支えるための社会づくりといった課題を解決する具体的な取り組みとしても非常に有効ではないか、ということが本事業全体を通してみえてきている。

例えば、公園など誰でもこられる場所で毎日開けるようになると「放課後や週末の子どもたちの育ちの場」となることはもちろん、乳幼児からお年寄りまで自然な形で集い、ふれあい、支えあえることから「子育て支援」「世代間交流」の場としても最適であるといえる。「父親の子育てへの参加」という面でも、ここでは父親自身得意な遊びや作業をしながら、自然と自分の子や自分の子ども以外の子どもかかわりをもつことが容易にでき、子育てをともに楽しむ仲間づくりができる。また、ありのままの子どもを受け止めることを大事にしている場であることから、子どもからのサインを受け止めやすく、児童虐待の発生予防にもつながると考える。

また「一人ひとりの子どもが輝く」ためには、一人ひとりの子どもがありのままにいられる環境をつくること、それぞれの個性、生きる力を発揮して育っていけるような社会的な理解やしきみづくりが必要である。冒険遊び場づくりの活動は、単に遊び場ができればよいというものでなく、このことをみんなで考え、地域の人たちが協力してそのような環境をつくっていかうとする自治的な活動である。そして、そのために市民・行政・事業者などが協力して進めていくこの活動は、「子どもが輝ける絆で結ばれたまち」を大きく推進する具体的な取り組みとなり、「子育てするならさいたま市」を実感できる事業となるのではないだろうか。



## (2) 冒険遊び場づくりをすすめるにあたって

ここでは、本事業からみえてきた冒険遊び場づくりをすすめるにあたっての必要な大事なポイントを整理し、今後に向けてを考える土台としたい。

### ●冒険遊び場の運営に必要なこと●

- ① 住民によって運営する
- ② 行政と住民がパートナーシップを築く
- ③ 専門職のプレーリーダーを配置する

### ① 住民によって運営する

○ 何か問題があると行政に解決を求める、という姿勢では子どもたちの自由な遊びは守れない。どのような環境を子どもたちに用意したいのかという自分たちの地域の課題として、住民同士が話し合いづくりあげていくことが大切である。

○ 場の運営にあたっては、責任のある運営団体として組織化される必要がある  
(参考資料) 「さいたま冒険遊び場・たねの会」組織図

○ 現場の運営に必要なこと

子どももののびのびとした遊びと、地域の実情にあわせた場の運営をうまくすすめていくために、子どもの代弁者としてのプレーリーダーと地域の代表者としての世話人とが話し合いをすすめながら場の運営にあたる。

○ 世話人は地域の人に場の趣旨や協力を呼びかけ、プレーリーダーや行政との連携をはかりながら、豊かな遊び場をつくっていくためのあらゆる仕事をこなす。

○ 「自分の責任で自由に遊ぶ」がモットーであるが、運営者は場からハザードをとりのぞき、事故やけがの際には適切に対応できるようマニュアルや対処法を備え、万が一の場合の保険にも加入しておく。(他市の事例では、行政は行政で加入しているところもある。)

(参考例) 加入保険: 「あいおい損保」NPO活動総合保険

傷害保険: 対象=役員職・会員・参加者

(死亡 500 万円・入院日額 3 千円・通院日額 2 千円)

賠償保険: 対象=施設・生産物 (2 億円)

## ②行政と住民がパートナーシップを築く

- 他市の事例をみても、定着している冒険遊び場は、市民と行政との協働で進められていた。住民によって運営されることが冒険遊び場づくりの根幹であるが、本来子どもの遊びの環境を保障することは社会的な課題であり行政のとりくむべき事業であるともいえる。このことから、市民と行政が連携して事業をすすめていく必要がある。
- その際には、社会的に意義のあるものとして位置づけ継続・展開していけるしくみをつくるために、行政の施策として位置づけてすすめていく必要がある。
- 冒険遊び場づくりがとりくむ課題は、以下のような部署にそれぞれ関連をもっており、連携して取り組む必要がある。
  - ・ 児童福祉関連部署（乳幼児の育ち、乳幼児をもつ親のサポート、  
子どもの生きる権利、青少年の健全育成、居場所づくり など）
  - ・ 教育関連部署（子どもの育ち、青少年の健全育成、子どもの体験教育、生涯学習）
  - ・ 公園・緑地関連部署（遊び場としての公園利用、市民による公園づくり、場の確保、安全管理）
  - ・ まちづくり・企画関連部署（協働によるまちづくり、新規事業の企画たちあげ）
  - ・ ボランティア関連部署（ボランティアやプレーリーダーの発掘、育成）
- パートナーシップを築く際には、冒険遊び場づくりはその考え方や運営の仕方がこれまでにない新しい取り組みであることから、このことを理解し共有するには多くの時間が必要な面もある。また、課題が様々な課にまたがっており、どんなことを目標にしたものなのかということをきちんと共有しておかないと具体的にすすめていく時にぶれていく可能性がある。そのため、市民・行政各課が遊びの環境の現況認識や何を目標とするかを共有することがまず必要である。
- 市民、行政の具体的な役割分担については以下のように考えられる。

	市 民	行 政
課題/目標の共有		○
場所の確保		○
資金の確保	○	○
運営/推進の計画		○
場の運営	○	

事業の実施形態としては、他市の事例を参考にして、さいたま市ならではの連携のしくみを考えていく必要がある。

- （参考）東京都世田谷区「羽根木プレーパーク」  
 埼玉県草加市「冒険松原あそび場」  
 神奈川県川崎市「川崎市子ども夢パーク」  
 神奈川県横浜市「横浜にプレイパークを創ろうネットワーク」

### ③専門職のプレーリーダーを配置する

プレーリーダー養成講座の講師嶋村さんによると、全国的に協働による冒険遊び場づくりがすすんだことでこの10年くらいでプレーリーダーを雇用できる冒険遊び場が少しずつ増え始めているが、その雇用形態は短期契約が多く、給与もサラリーマンや小学校教諭から比べても大変低く、日本ではその必要性もふくめて「職業」としての地位が確立していない段階にある。

しかしその働きは、深い子ども理解とまちづくりまで含めた幅広い視点や対応力を必要とされ、常時その場において責任をもつ職業として理解されるべきであることがわかった。社会的な位置づけの中でその生活が保障されるような体系をつくっていかなければ、プレーリーダーになる人材の養成・確保、ひいては子どもの遊びの保障ができないことになってしまう。

まず、この点をふまえた上でプレーリーダーを雇用できるしくみをさいたま市としてつくっていく必要がある。

そして、全国的にプレーリーダーが不足し、その育成についての取り組みもまだ確立していない中、どのようにプレーリーダーを確保していくか、ということをも市民・行政・大学・他団体などとも連携して考え実践していくことが必要ではないかということが、今回のプレーリーダー養成講座を通してみえてきたのではないかと思う。

さしあたっては「プレーリーダー」とはどんな存在なのか、ということを知るためにも、経験のあるプレーリーダーを確実な手当のもと雇用し、一緒に遊び場づくりをすすめながら後継となる人材が生まれるような受け入れ体制をつくっていったり、運営者がつながりのある中でそのような人材をみつけてくる、といったことになってくるだろう。

### (3)今後に向けて

以上、事業全体の報告と成果をまとめてきたが、それをふまえた上での今後に向けての具体的な取り組みを提案して、本報告を終わりにしたい。

冒険遊び場づくりは「(1)冒険遊び場の可能性」でみてきたように、今日の社会において大きな意味と役割をもつ可能性のある取り組みであると言える。しかし、事業をすすめるにあたっては、市民の側の理解や体制づくりが必要であり、行政との協働も必要である。そして、その課題が多岐に及んでいることから、行政内の連携もすすめることで、より充実した運営が可能になってくることが分かった。

その協働や連携のあるべき姿は、本事業でおおよそ明らかになったと思われる。さらには具体的にどうしていけばいいかということも「ちえぶくろ会議」の意見をもとに整理することができた。この結果をもとに、もう1度、市民として、行政としてできることを振り返り、また一緒になってできることを考え、行動していくことが必要である。

具体的には、今回課題として出てきたことをさらに話し合っていくための「ちえぶくろ会議」を継続すること、また、これまで試験的な開催として位置づけられていた「別所沼プレーパーク」を、「常設にむけて」という位置づけの中、始動させていくことが必要である。その際には、市民側の協力体制・運営体制をもっと強化していくこと、今回明らかになった市民の声をふまえ、行政の事業として位置づけた上でプレーリーダーを雇用できる体制をつくっていくことなどが必要になってくる。そして、この「別所沼プレーパーク」をさいたま市の冒険遊び場づくりのモデルケースとするとともに、プレーリーダーを育成する拠点としていき、さらに他の地域でも取り組めるような、市民側、行政側の体制も並行してつくっていく必要があるのではないだろうか。

しかし、「行政の事業として」を考えた場合、冒険遊び場づくりが「子どもの育ち」「生きる権利」「子育て支援」といった面を支える事業であるにもかかわらず、現在さいたま市には、この冒険遊び場づくりをそのような事業として位置づける施策がない。(1)の⑦「さいたま市の計画における取り組みとして」であげられたような施策の中で位置づけるなどして、この市民活動をサポートし、行政の事業として広く推進できるようにしていくことを提案したい。

## おわりに

本事業は「協働による冒険遊び場づくりを考える」ことを中心として実施してきたが、「ちえぶくろ会議」参加者からの感想でもあったように、気がつけば子どもの環境をつくってきた大人の側の問題に話が及ぶことが多かった。

本来、子どもは遊ぶ力、生きる力をもっている。しかし、生きていく社会は選べない。「ひとりひとりの子どもが輝ける社会」というのは、現代の様々な問題を抱えた社会においては、相当な覚悟と協力をもってつくりあげていかなければ簡単に実現できるものではない。

すでに30年の歴史を持つ世田谷区の「羽根木プレーパーク」を初めて訪れた時、ものすごい衝撃と感動を覚えた。頭上3メートルはあろうかというところで子どもたちが綱渡りをしている。屋根から飛び降りて遊んでいる。子どもたちが掘った穴がいたるところにボコボコとあり、木でつくられた異様な建造物があちこちに建っている。決して綺麗ではない、安全ではないその場所で、何よりも心をうったのは、子どもたちの自信と信頼に満ちたような姿と大人への接し方だった。

遊びは子どものやりたい気持ちから生まれる。遊びの世界は善悪でなく快・不快という情動の世界のものであり、それは子どもそれぞれに違う、いわば今を生きる「その子そのもの」である、と「羽根木プレーパーク」初代プレーリーダーの天野秀昭さんは語っていた。そして、今子どもたちに必要なのは「教育で育てる＝教育」よりも、「遊び育つ＝遊育」の環境を整えることであると提唱している。

先の羽根木プレーパークの子どもたちの自信と信頼の源を考えたとき、それはまさに「自分自身を生きている」という実感とそれを守ってくれている大人への信頼なのではないだろうか、ということの本事業を終えてあらためてかみしめている。

実際に冒険遊び場をつくり、運営していく際には、様々な課題があり努力や協力が必要になってくる。しかし、冒険遊び場づくりが単に施設をつくることだけでなく、本当に子どもたちに必要なことは何なのかを考え発信できる拠点として、子どもの遊びや成長を保障できる長きにわたるしくみをつくっていける取り組みであることを考えれば、ぜひ全市的な協力体制をつくっていくことを希望したい。

本事業開催にあたって、担当課である「都市公園課」高橋さん、佐藤さん、中井さん、「市民活動支援室」大沢さん、平井さんはじめ、ちえぶくろ会議に参加くださった関係各署のみなさま、参加者のみなさま、進行役をつとめてくださった「ハンズオン！埼玉」の西川正さん、プレーリーダー養成講座を共催してくださった「さいたま市社会福祉協議会浦和区事務所」担当の長谷川さん、講師の嶋村仁志さん、参加者のみなさま、プレーリーダーの「ユウタ（石塚祐太）」、「さいたま市公園緑地協会」のみなさん、たねの会スタッフ、お手伝いくださった方々、そして遊び場に遊びにきてくれた子どもたち、声をきかせていただいたお父さんお母さん、地域の方々。

様々な人の中で育てられていく事業であることをあらためて確認することができた。次につなげるための決意と深い感謝を申し上げて本報告書を終わりにしたい。